

井伏鱒二「復員者の噂」論

— 復員者夫婦の諸相に見る戦争への告発

李 冬 陽

初めに

復員兵は、戦後の日本社会を考える上で、看過できない重要な問題である。そもそも「復員」という言葉は、戦後間もない頃によく用いられた用語であり、敗戦の年の日本では流行語となっていた。一九四五年八月一四日、日本政府はアメリカ、イギリス、中国などの連合国に対して、ポツダム宣言の受諾を発表し、第二次世界大戦が終了した。ポツダム宣言の第九条は、「日本国軍隊は完全に武装を解除せられたるのち、各自の家庭に復帰し、平和的かつ生産的の生活を営むの機会を得しめられるべし」と規定されていた。召集した兵員の服務を解くこと、また解かれて帰郷することを「復員」と呼ぶ。戦前には召集解除者は「凱旋兵」「帰還兵」と呼ばれており、「復員兵」などの呼称は戦後からである。⁽¹⁾ そうした復員兵たちを待っていたのは、戦場よりさらに残酷な復員後の生活であった。日本国民は、大日本帝国の敗戦と、それを招いた元軍人たちに強い反発を抱えており、復員兵に向けられる視線は冷やかであった。復員兵らの中には、彼らを待っていたはずの家族を亡くしてしまった者もあれば、家族の所在や生死さえ定かでない者や、戦死の誤報がなされたことで妻が再婚し新たな家庭を

築いているといったケースも少なからずあった。しかし、家族との再会より一層深刻なのは、敗戦直後の大量失業という厳しい現実の中、彼らが直面せざるを得ない職業問題である。一九四六年四月二六日の人口調査結果によると、現在失業者が約二五五万五千人、潜在失業者は約三四万六千人、全失業者は約六〇〇万一千人となっている。⁽²⁾ このように、家族との再会が困難であったことや、戦後の国民意識の変貌、さらには生活難や就職難が、復員兵の一部を犯罪に走らせた。

川本三郎は、復員兵について次のように述べている。

「大日本帝国」が突然「民主日本」になったからといって、すぐにその現実を追いつくことは、戦場を経験した者であればあるほど出来はしない。頭の中ではいくら日本は新しく再生したと理解していても、心情が、肉体がそれに追いつかない。客観的には戦後を生きていながら、主観的には戦中を生きる。そういう二重構造を生きる者として大きく浮き上がってくるのが「復員兵」である。⁽³⁾

戦争は終わったものの、復員者たちには自分自身との闘い、戦後日本社会との「戦争」が待っていた。こうした時代状況を反映させた言葉として、「復員兵」は戦後日本の風景の中で見逃すことのできない

存在といえる。戦後の日本映画には復員兵を主人公にした映画も多くみられ、また、文学作品においても、復員者を扱ったものは少なくない。⁴⁾

太平洋戦争中、現地の文化工作のためにシンガポールの戦場に徴用された井伏鱒二もまた、復員兵の表象にこだわった作家の一人である。一年間の徴用体験、帰国後の疎開生活及び敗戦の経験は、井伏に強い影響を与えており、井伏文学における重要な転機とも言える。戦後の井伏作品にみられる大きな特徴として、復員者を登場させる作品群が存在していることは見落とすことができない。井伏鱒二は戦後に発表した最初の作品から、しばしば復員者を描いているが、特に復員者を中心に扱ったものとしては、「病人の枕もと」（『オール読物』一九四六年一月）、「復員者の噂」（『社会』一九四八年六月）、「遙拝隊長」（『展望』一九五〇年二月）の三作品が挙げられる。いずれも一作品の中で一人か、あるいは多数の復員者を登場させている。そのうち、「遙拝隊長」は、既に多くの研究がなされ、戦後の井伏の動向を把握する代表的な作品として位置付けられている。

しかし、一九四八年六月に鎌倉文庫刊行の雑誌『社会』第三卷第六号に発表され、同年の一二月に陽明社刊行の作品集『山峡風物誌』に収録された「復員者の噂」は、井伏研究の中では看過されており、これまであまり論じられてはこなかった。これは、「当村大字霞ヶ森」へ帰ってきた十名あまりの復員者たちをめぐる物語である。戦争未亡人のツキヨが、様々な境遇にある複数の復員者の夫婦たちの再会した時の様子を聞き書きするという形式がとられている。敗戦前に召集令を受け、終戦後になっても入営せざるを得なかった木下と西。母親の

乳を吞んでいる子供が自分の子供だと意識せず、「オツヤ、その子は何か」と不気味そうに言った直吉。自宅に帰る前に、妻にどうしても私服を持ってきてほしいと外で電話を掛けた養人の東吉さん。妻のトキノが戦死公報を受け取って再婚し、円満な生活を送っていた時、突然復員してきた宙さん。――戦場から戻って間もない時期の復員者の様子や、夫婦の再会の場面が活写される。

数少ない先行研究では、熊谷孝がツキヨをはじめとする復員者たちの噂話を喋る戦争未亡人のツキヨに着目し、「自分たちだけが悲しみや苦しみの中に残り残されたというか、相手に裏切られたような気持ち」を持つことで、彼女が「自分が優越の立場に立ったためには相手のアラ探しを始めるほかはない」⁵⁾と指摘している。熊谷の論では、戦争未亡人と復員者夫婦たちの心理的対決を提示しているが、しかし、戦争機能に潜むジェンダー構造および、作品における語り手（＝聞き手）の性格の両方とも看過できないのではないか。また、平岡篤頼は作品の結末における「こんな復員者たちの内幕のことが、どうして人に知られたのかわからない。しかしツキヨさんは見て来たように話すのである」という記述について、「作者はその一次的物語もあくまで物語であって、現実の忠実な再現ではない」ということを承知して⁶⁾、いると述べるが、しかし、井伏が当時書いた日記や作品に対する彼自身の解説を対照すると、この作品は決して単に「物語」として位置付けられているわけではない。

「復員者の噂」は一見すると、復員者をめぐる単純な物語であるが、実際には決して復員者表象の追及だけにとどまらない。井伏は「復員者

の噂」を通じて、執拗に復員者と家族の境遇の可能性を追求していたのである。本論は、この作品に描かれる復員者夫婦のあり方を通じ、〈戦争と性〉、〈銃後の女たち〉、〈噂とジェンダー〉といった問題に着目したい。また、これまで指摘されていない井伏の当時の日記の記述と対照した上で、この作品に描き出される復員者たちのそれぞれの境遇によって投影される日本の農村の状況、及び、本作品の井伏の戦後作品における位置づけを解明していきたい。

一、終戦後の見送りと復員

「復員者の噂」の冒頭部では、「敗戦になる直前に召集令を受け、八月一六日に入営すべしと命令されていた」木下と西が登場する。八月一日、終戦を迎えても彼らには召集令状の取り消しが届かない。二人は「後難」が起きないように入営することにし、「村長や兵事係などが甚だ当惑」しながら見送る。この敗戦後の見送りの挿話は一見、復員者と家族の有様を扱う本作品の主題から逸脱しているようであるが、実際には、非常に興味深い挿話である。見送りの場で、村長の演説は次のように記されている。

只今、木下君と西君と両君がこもごも終戦について所感を述べられ、且つまた、終戦になってから入営されるについて、私たちが見送りのもの一同に家業を休ませて心苦しいと申されましたが、これも止むを得ない成り行きであります。(中略) 両君ともすでに四十歳に近く、妻子を残されて出かけられるのは、心残りのことと察しられますが、私たちは出来るだけ助けあつて行きたいと

考えます。どうか元気で出かけください。これが終戦前のことでありますなら、私の演説は慣例にしたがって美辞麗句をつらねることでありますが、いまではもうお互いに顔を見合わずな思いであります、どうかその点に御諒解を願いたいのではありません。それからまた、従来なら見送りに際して、万歳を三唱するが方式であることは申すまでもないのでありますが、無条件投降後の今日のことですから、特に万歳の三唱は割愛いたします。その点についても、どうか悪しからず御諒解のほどを、お願いしたいのであります。

出兵の見送りに関する研究は少なくない。銃後研究に大きな影響を与えた藤井忠俊は、出征兵士の見送りを「赤紙の祭」と称して、それは「見送る者と見送られる者の一体感を形成する場」であり、「その一体感こそが戦争を聖なるもの」とする視点を提示する。さらに吉良芳恵は、藤井忠俊の民衆側の見送りの視点を受け継いだ上で、国家、特に軍が、兵士の見送りにどのように対処するのかについて考察し、町村での見送りの盛衰を明らかにしている。⁽⁸⁾ 吉良の指摘によると、満州事変期から、軍は入営兵への餞別や除隊兵の返札などの旧習を打破しようとしたが、民衆の習慣を変えるまでには至らなかった。また、戦争の長期化につれて、「華美な歓迎会の自粛」が軍に求められるようになつていて、一九四一年の関特演⁽⁹⁾に至っては、防諜のため、従来に見送りが禁止されていた。米英と開戦後、「銃後の鬱屈した気分を一掃し戦意を昂揚させるため」、軍は見送り等の制限を緩和せざるを得なくなつたものの、戦局悪化後、「赤紙の祭」の熱狂は、「どこにも見当たらず時代が到来した」とされる。

このように、民衆の見送りの積極性は、戦局の情勢と深く関わっている。「復員者の噂」が描く、敗戦直後に行われた出兵の見送りと、戦時下におけるそれとの差異を見て取ることは難しくない。戦時における出征兵士を見送る時の戦意高揚的な姿勢に対し、村長も兵事係も「当惑し」、また、戦況の転変によって、村長の演説で従来の「美辞麗句」や、「万歳の三唱」といった形式はすでに時代錯誤のものとなっていた。農村共同体での見送りからも、終戦による世相の転換の一端を窺えよう。

「復員者の噂」の背景には、井伏自身の実体験としての疎開生活がある。井伏は、一九四四年五月から一九四五年七月まで、甲府市外甲運村に疎開し、後に広島県深安郡加茂村（現福山市）の生家に再疎開して、そこで敗戦を迎え、一九四七年七月まで滞在した⁽¹⁰⁾。井伏が甲州から広島県に再疎開中の一九四五年の七月一〇日から八月一六日に付けた日記をまとめた「疎開日記」が、一九四八年の三月に発表された。興味深いのは、八月一六日の項における次のような記述だ。

八月一六日（昭和二〇年）

御存じのような世情になりましたので、万歳三唱はやめます。しかし三君とも召集令状が来ていたのでから御見送りしませず随分とも御気をつけて……⁽¹¹⁾ という言葉があった。敗戦前に令状が来ていたそうである。

敗戦が宣告された翌日という微妙な時点で、敗戦前に召集令を受けた男の「出征」と見送りが記されている。「疎開日記」に記録されたこの場面は、まさに三ヶ月後に発表された「復員者の噂」で描かれている見送りの場面と重なり合う。このように、日記で記された見聞を

作品に利用することを通じて、戦後の井伏の「記録的」姿勢は一層強なものとなっていった。

木下と西の二人は、敗戦になって入営させられることについて、「家業を休ませて心苦しい」と告白する。敗戦後の出征では、国家や軍のためという「大儀名分」はすでに転覆されている。また、従来の「前線行き」永遠の別れ」という図式も崩壊し、一家の働き手を奪われる「心苦しい」ものにほかならない。また村長の演説からは、出征兵士の「後顧の憂」に、家業を休むことだけでなく細君を残してゆくことも含まれていたことが窺える。こうした家族の経済的負担と夫婦関係が揺らぐことへの不安という二つの要素が、出征兵士の心の葛藤の根源となっている。加納実紀代が「妻の「忌まわしい素行問題」は、出征兵士の「銃後の憂」の最たるものであった」と指摘するように、村長が言う残された細君たちを「助け合う」こととは、細君たちの貞操を監視する意味も含まれているだろう。

ただ滑稽なことに、この二人の入営者はその翌日に帰って来る。

彼等の細君は、まるで久しぶりに帰って来た復員者を迎えるように亭主を迎えた。木下の細君は、夕飯をたべる前にお化粧をして木下に酒のお酌をしてやった。西の細君はバスの運転手に魚を買って来てくれと注文して百円札を手渡した。そして、亭主に話しかけるのに、いやに「ねえ、ねえ」という東京言葉を真似て使っていた。

「記録者」の姿勢を取った井伏は、見聞した終戦直後の村での見送りを、「復員者の噂」に投影したと考えられ、彼はこの実体験を素材にし、本作品における一つのタイプの復員者を作り上げた。ただ、二

人の「出征」は、敗戦によって従来の「前線に行く」ような壮絶なものではなくなった。さらに滑稽なものとして描かれるのは、やはり細君たちの反応であろう。夫が一日間しか入営していなかったにも関わらず、細君たちは、夫が戦場から無事に帰ってきた一般の復員者であるかのように扱い、化粧したり、料理を準備したりして、喜びながら盛大に迎える姿勢を取る。そればかりでなく、方言を捨て、「上品」だとされる東京言葉話すのだ。方言という（日常）と、「東京言葉」という（非日常）の二項対立の中、いかにも礼儀正しく夫を迎えようとする細君たちの姿が浮き彫りにされている。細君たちは一見、滑稽で大袈裟な歓迎の行事をするが、それは当時の「社会規範」に沿う方式であり、復員者夫婦の円満な再会という理想的な状態を提示しているのではないか。こうした場面が作品の冒頭部で描かれることによって、後で登場する戦場から帰って来た一般的な復員者たちの円満ではない家族との再会と、鋭い対比を形成するのである。

二、細君の貞操への不信任を抱く復員者

東条英機は、一九四三年一月一日午後七時二〇分から、ラジオを通じて、婦人総蹶起を呼びかけた。戦争時における日本婦人の役割である「強兵育む日本の母」と「勤労働員」、いわゆる「勤労」と「母性」という二つの要素が、銃後の女性たちに要請されたのである。⁴さらに、「食糧増産という重大使命が負わされていた」農山村女性の戦時下の日常生活について、早川紀代は「男手を失った主婦たちは女性蔑視の規範が強固な農村社会で伍していくために、「女らしさ」どこ

ろでなく、男になってなりふり構わず動かなければならなかった」と指摘している。⁴「復員者の噂」で一番目に復員してきた直吉の細君であるオツヤは、まさにその一員である。

彼女は直吉の出征中、姑と協力して開墾山に二畝歩の芋畑を新しく仕立てた。からだも大きい手も足も太く、ただ働く一方のよく稼ぐ嫁だといわれていた。

戦争の長期化は農村の労働力を不足させ、女性の負担は増大していった。オツヤは当時の「勤労」という社会的規範に答え、よく働くことで村人たちに評価される。にも関わらず、二年生になった子供にまだ母親の乳を舐めることで、復員してきた夫の誤解を招く導火線となってしまう。直吉が帰宅したときに、ちよどり子供の和平が母親と抱かれて乳を舐んでいた。

「オツヤ、その子は何か。」

と復員者は不気味そうに云った。

「あらあんな。」

と女房が云った。

子供は乳を吸いながら、見しらぬ顔の復員者を横目で見つめていた。

「その子は何か。オツヤ、また生んだのか。」

「あら。何を云うの、あんな。これが和平ですが。」

「そうか、これがあの子か。そうか、和平か。」

（中略）

「あの子は、びっくりしたんだろうな。僕はまた、お前は別に赤ん坊を生んだのかと思った。」

「何を云うの、あんた。私は、大丈夫ですが。」

直吉は和平が生まれて一年目に出征して、小学二年生になっていた年に帰って来た。六、七年あまりの不在で、自分の子供だとは意識せず、細君が別の男との間に赤ん坊を生んだのかと想定した直吉は、細君への不信感を露骨に表している。直吉は子供を抱き上げたいが、和平は「母親の膝から滑り出て、復員者の手の下をくぐって土間の外にとび出し」た。このような再会によって、直吉夫婦双方が直面せざるを得ない疎外が浮き彫りにされる。細君にとつての疎外は直吉からの不信感によつて生み出されたものである。一方で直吉もまた、長年の留守による子供からの疎外を感じたに違いない。直吉がこのような反応を取つたのは、オツヤの子供に対する不思議な「溺愛」によつて、和平が自分の子供であることを意識しなかつたのが一因であるが、それより一層重要なのは、やはり見送りの場面で言及されている「後顧の憂」という当時の一般的な社会認識が、細君への不信感を招く働きをすることであろう。喜多村理子は、島根県簸川郡の某家に残されていた夫を戦場に出した妻への配布物の例を紹介している。¹⁾

勇士の妻のちかい

- 一、朝夕あなたの御武運長久をいのります。
- 二、朝は清水夕はかげ膳を自分の手でおそなえます。
- 三、一週一度はぜひ自筆のたよりを出し月に一度は慰問袋を送ります。
- 四、きつと行をつつしみ一家元気にむつまじく立派に留守を守ります。
- 五、不自由に打ちああなたに代つて一生けんめい増産と貯ちく

つとめます。

喜多村は、この配布物を、「国家の思惑通り戦争を下支えする民衆像をイメージさせる」と指摘している。軍部は、「勇士のちかい」のような配布物を通じて、「軍国の妻」に対する監視的態度ないし督励的態度を露呈する。ここで読み取れる「勤労」と「貞操」という二つの要求は、戦時下に銃後の女の素行を監視する思想的土壌となつている。この配布物自体からも、「軍国の妻」への社会的な不信による管理の厳しさが読み取れるのではないか。こうした背景の中、子供に乳を吞ませている細君を見た直吉は、条件反射的に細君の貞操を疑ってしまう。

一方、姑から見れば、「勤労」と子供の和平に対する「母性」そのものも嫁の「不貞」を防ぐ手段となつていった。子供に毎日乳を吞ませる嫁について、直吉のお袋が近所の人に「うちの嫁はまだ乳が出るか出ないかしらないが、子供に乳を含ませている間は、嫁も浮気はしないだろう」と語つたように、細君の貞操は夫だけでなく、お袋にも警戒されている。このように彼女は、二重の意味で疎外されている。一つは、復員者の夫からの貞操への不信感による疎外であり、もう一つは、姑によつて銃後の性的関係が監視される疎外である。

さらに、再会の場で、お袋を見た直吉は、バスの窓から大きい声で「お母さん」と呼び、涙をためて、お袋への熱い情愛が端的に描き出される。母親に対して抱いた感情は純粹な嬉しさにほかならない。しかし、細君との場合、その嬉しさ以外に、やはり隠そうにも隠されない葛藤がある。復員者の直吉の、お袋への感情と細君への気持ちにある格差は否めないのである。

三、疎開者復員者夫婦の円満に見る格差

二番目に復員した東吉さんの描写について、テキストは家庭の状況を詳しく紹介する。東吉夫婦は、そもそも「当村大字霞ヶ森」の村人ではなく、疎開者だった。地主で医者である父を持った東吉さんは、徴用される前は「東京に出て上の学校の先生」をしていた教養人であり、妻子を父親のところに残して従軍した。細君は、子供が町の中学校へ進学するようになると自分も町へ出て、女学校の教師になっていた。この復員者夫婦も父親も知識人であり、恵まれた経済条件にあつたのである。このような家族状況は、農民である直吉夫婦とは対極である。東吉さんは復員して自宅に直接に帰るのではなく、まず郵便局から自宅へ電話をかけた。電話に出る自宅のお手伝いの人に、「自分が何者であるか容易に知らせ」ず、「ともかく東京の奥さんに電話口に出てもらってください」というだけであつた。さらに、電話に出る妻に背広などの私服を持って来てくれと頼む。東吉さんの心の葛藤は、前述した直吉ほど露骨ではなく、むしろその葛藤を隠そうとしており、妻は次のように反応する。

「あなた、でもお父さま、お待ちかねですわ、ちよつと帰って来てくださいますか。武郎（息子…引用者注）も待っておりますわ。あたくしも毎日のこと、ほんとにお待ちしております。」

「そんなこと言わないで、いま云つたもの、すぐ持つて来てくれないか。」（中略）

東京の奥さん（東吉さんの妻…引用者注）は両手で顔を覆つた。

妻も父親も、東吉さんが私服を取つて家を出ようとすると誤解して、緊張し絶望していた。帰つて来た東吉さんは、妻に本音を吐く。

「背広なんか、どうでも好かつたんだ。いきなり帰るのが、何だか怖ろしいような気がしたのでね。」

「なにが怖いんですの。」

「それが、いまになると、はっきりしなくなつた。しかしびくびくしていたのは事実だ。やはり、お前の気を引いてみたかつたのかもしれないね。」

「少しは、わかるような気がしますわ。あたしの、あなたに対する気持ち。ちよつとそれに似ているかもしれませんわ。」

東吉さんの「恐ろしいような気持」は、やはり妻に深く関わる。妻のことを聞いてみたかつたから、直接に帰らず、妻に電話に出てもらふことにしたのである。それと同時に、妻の「それに似ている」気持ちには、夫を失ふことの恐れから来るものであろう。加藤秀俊が、当時の復員者の悲劇について、「妻が再婚してしまつたケースもあつたし、また逆に、外地で結婚して現地妻とともに帰国し、日本で待ちわびていた本妻を破局に追い込んでしまつたケースもある」と指摘しているように、夫の留守中における細君の再婚だけでなく、戦場での夫の再婚もまた、復員者夫婦の「破局」の原因となり得たわけである。東吉さんの妻は、夫に現地妻がいるかもしれないと勘違いしたのではないか。こうした背景の中で、東吉夫婦双方とも、出征する前と同じような幸せな夫婦生活に戻ることができるとかどうか、と心配していた。幸いに、この二人は「新婚の夫婦みたいだと近所の人たちにうわささ

れる」ようになって、再会の場での夫婦関係の一時的な揺れ動きを、元来の幸せな生活に回収させることができた。それだけでなく、半年後、「雑誌関係の仕事をするために夫婦一緒に東京へ転入し」た。終戦直後、復員者が大量失業に直面せざるをえなかった背景の中、教育に携わった東吉さんは復員しても雑誌関係の仕事が見つかる。東吉さんは、夫婦関係でも就職でも、円満に戦後に復帰したのである。こうして、経済的ゆとりと学歴がある恵まれた階層の復員者夫婦と農民復員者との格差が端的に垣間見られる。

四、遺族の「模範」であった細君の再婚と帰ってきた「英霊」

三番目の復員者は、一番深刻な状態に陥っていた。それは、死んだはずの兵士が帰って来た、いわゆる「生きている英霊」の挿話である。宙さんの妻であるトキノは、夫の戦死の公報が届いて以来、「会う人ごとに身の不幸を訴えてよく泣いていた」ことで、近所のひとたちに「からすの鳴かぬ日はあっても、宙さんの後家の泣かぬ日はない」と言われ、後に「出征軍人遺族の模範的な婦人」と表彰されることになった。しかし、彼女は、新聞に取材される前日に、隣村の九郎さんという戦傷者と駆落ちした。

村の役場の人たちは、彼女の駆落ちが部落の名誉に悪い影響を与えることを心配していたが、彼らの「まごつく」様子に対して、新聞記者は「案外に物分かりがよかった」。「出征軍人遺族の模範的な婦人」というラベルが貼られた戦争未亡人が、他の男と駆け落ちしてしまう事件に対して、新聞社はその事実を報道せず、トキノさんの取材

を取りやめて、戦争未亡人の駆け落ちを隠すために平気ではかの戦争未亡人を選んだ。形式主義に陥った新聞報道の不徹底性への風刺もここではつきりとされる。また、こういう事件が当時、いかに頻繁に発生していたものであったかが、記者の「落ち着」いた模様から窺えよう。北河賢三は、「敗戦後、比較的早い時期から地方紙などに、未亡人・戦争未亡人・母子家庭に関する記事が載ることはあったが、ジャーナリズムが未亡人問題に眼を向け未亡人の生活や訴えを取り上げるのは、おおむね一九四八年からであり、『婦人公論』『主婦之友』『婦人』などの婦人雑誌が目立つ印象である」と指摘している。一九四八年は、ちょうど「復員者の噂」が発表された時期である。井伏は、「時代感覚の鋭敏さと批判の確かさ」が評価される作家であり、新聞記者を登場させる場面も、単なる偶然な「空想」とは言えない。

「模範的な婦人」の名誉を重んじる軍部の期待から逸脱していくトキノさんは一カ月後に、九郎さんと結婚披露をした。しかし、死んだはずの宙さんは帰って来た。宙さんは、生活は出征する前のままだと思ひ込み、細君の再婚相手には全く気がつかなかった。宙さんの無事な復員は、トキノさんと九郎さんには衝撃を与えたとはいえない。九郎さんは、自身が夫婦関係の破壊者のように実感して、こっそりと実家に逃げてしまった。再婚相手の九郎さんが帰ったにも関わらず、この復員者夫婦の生活はすでに元の日常には戻れない。「大変に無口になっていた」宙さんは、「たまに外に出ると自分のお墓に参って木の枝などを花立てに差して拝んで来るだけである。トキノさんも近所の人たちも、宙さんが何を考えているのかいっさいわからない」。戦争後遺症にかかったかのように見える復員者の宙さんは、人々とは一切の

交流がなくなり、部落の「異物」のような存在になってしまふ。自分のお墓に参つて、死んだ自分と生きている自分の狭間で、その亀裂に苦しんでいる宙さんにとっては、戦争の記憶は切離そうにも切り離せない。彼は、死んだはずの自分にどのように向き合うべきなのかを葛藤しながら戦後を生きている。細君のトキノさんの方は、再婚者に逃げられることと、「生きている英霊」の帰還後の夫婦生活の「変質」という二重の疎外を体験したのではないか。トキノさんにとって、夫の戦死と、再婚後における前夫の帰還という、二度にわたる円満な生活の崩れによる被害性はいかに深刻なものであったか。宙さんの復員によって、細君と彼女の再婚者はもちろん、宙さん自身も含む一連の悲劇が起された。戦争が終わっても、戦争による被害は簡単には消されないのである。

五、戦争未亡人の「噂話」を聞き書きする図式

以上、井伏の日記に記録される銃後の見送りの場面がいかに作品に投影し応用されているのか、また、「復員者の噂」に描かれる様々なタイプの復員者夫婦をめぐって分析を行った。注意すべきなのは、すべての内容は、村の一人の戦争未亡人であるツキヨのお喋りを並べた形になっているという点である。そこで、「女の喋り」という言葉に潜むジェンダーの問題に注目したい。『うわさの心理学』¹⁾では以下のような説明がなされている。

われわれが、うわさを女性の気晴らしであるとするのは、よく知られた紋切型である。作家のレオ・ロステンによると、うわ

さ好きの女性を意味するユダヤ人のことば「イエント」*Yenta*は男性を指すとき、「女のようなおしゃべり」という性差別の偏見からくる侮辱のことばなのである。しかしこの古い紋切り型は話している状況に即して、人為的に作られたものかもしれない。一般に女性の間で、うわさあるいは「おしゃべり」*gossiping*と云われることは、男性の場合には職場を離れた場所での「仕事の話」*shop talk*とか、「油を売る」*shooting the breeze*と呼ばれる。

噂は従来、女のお喋りを意味するという社会意識が世間に定着し普及されたという。さらに、心理学では、うわさは地位を保つための手段として考えられる。復員者の細君たちと比べ、三十二歳の若さで戦争未亡人になったツキヨは、共同体の下層に置かれた劣等感を持たざるをえなかっただろう。復員者の細君たち、また、復員者の夫婦生活に対するツキヨの思いには、嫉妬や屈折があるわけである。終戦になつて、次々「難癖をつける」戦争未亡人たちは、部落の平和を脅かす存在にもなっている。

戦争未亡人とされていたトキノさんは、絶えず世間の監視にさらされている「性的関心」の対象であり、一方で同じ戦争未亡人であるツキヨは、逆に、監視者の一員になってしまふ。銃後の細君たちの有様及び復員者夫婦の再会についてのお喋りそれ自体は、性的関係に疎外されることによる性的欲望の露骨な現れではないか。うわさを伝播するツキヨは結局、洩れなく再会した復員者夫婦の噂話を流すことを通じて、自分の不幸を晴らそうとする。自分の不幸を招く元凶が夫を奪った戦争であるとは意識できなかったであろう。

また、聞き書きとは、喋る人と記録者の共同作業であり、喋る人だ

けでなく、記録者の位置づけも看過できない。小説の冒頭部で、ツキヨを「難癖をつけてあらぬことをしやべってまわる」という記述には、記録者のツキヨへの嫌悪が示され、彼女が伝播する噂話の信頼性を動揺させようとするかのようなのである。しかし、作品の結末ではまた、「女のお喋りそれ自体には、情報を掻き集める要素があるかのように思われる」と語り、噂話を「情報」として回収させる。ツキヨに語られることは「難癖をつけてあらぬこと」にしても、信頼性があるのだと、記録者は読者に示唆している。このような揺れ動きの姿勢が、作中に記録者の存在を示すしとして機能している。物語を聞き書きという形をとることで、作品の世界から一步後退しようとする作家の井伏の客観的姿勢を読み取ることができよう。実際、井伏は、本作品の発想について、次のように述べる。

戦争直後、村に帰って来る復員者のことを少しづつ書いた。差障りがある話は、誰だかはつきり分らないように書いた。もう亡くなった人が多いので、在りのまま書いた方がよかったかも知れぬ。普通の性格の人のこと、ありふれた実在の人のことはそのままに書いた。²⁰¹

「普通の性格の人のこと、ありふれた実在の人のことはそのままに書いた」と告白し書いた「復員者の噂」は、やはり「庶民の一人」として経験した産物と言える。

終わりに

本論では、これまであまり論じられては来なかった「復員者の噂」

を扱い、作中に表象される復員者夫婦たちの有様とその周辺を考察した。実際、「復員者の噂」以前の井伏の戦後作品でも、農村という舞台に、復員者をしばしば登場させていた。戦後初の作品とされる「病人の枕もと」（『オール読物』一九四六年一月）では、自己認識に苦しむ復員者の輪吉、「橋本屋」（『世界』一九四六年一月）では、細君の不遇による家庭が崩れてしまうことに遭う洋太郎さん。そして、「復員者の噂」では、それまでの復員者表象をより一層深化させ、様々なタイプの復員者たちを同時に登場させる。井伏の聞き書き的作品について、東郷克美が「戦後になって圧倒的になって」きて、「『黒い雨』はそのような方法的試みの一つの到達点だった」と指摘する。井伏は「黒い雨」は「小説でなくドキュメントである」と述べ、²⁰²「空前の出来事であり二度と繰返してはならないことだから、もっと広い範囲にわたって、もっと大勢の者で手分けして記録すべきではないか」と思う。即ち大局的に云って、私は狭い範囲内で聞き書きしたにすぎないのだ」として、戦後は記録的精神を始終貫いていた。「復員者の噂」もまた、ある意味で復員者夫婦のドキュメントと言えるのではないか。

復員者夫婦の実態は、戦争未亡人のツキヨによって語られ、さらに、作中の身分不明の記録者の筆によって濾過される。宣伝班員として徴用された井伏は、前線に行くことはなかったが、戦争に翻弄される運命への抵抗は戦後になってもなお語られ続ける。この作品の中で、復員者それ自体は唯一の対象ではなく、それより一層復員者たちの家庭生活に関心が払われている。井伏は、「叫ぼうとはしない」作家²⁰⁴と言われるが、「復員者の噂」を通じて、銃後の女の貞操への監視、動揺

した男女関係、復員者の階層性、生きている英霊の帰還及び戦争未亡人をめぐるさまざまな社会問題といった、戦後における復員者の周辺を十分に描き出すことで、戦争そのものへの告発を遂げたのである。

注

- (1) 「復員軍人」「復員兵」などの称由来について、米川明彦は『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』（三省堂、二〇〇二年一〇月）で、「戦後の一九四五年八月二五日に出された『陸海軍の復員に方り陸海軍に勅諭』からである」と指摘する。
- (2) 労働省職業安定局失業対策課編『失業対策年鑑』（日本図書センター、一九五一年）
- (3) 「三船敏郎と復員者」（『世界』五六九、一九九二年六月）
- (4) 復員兵を描く戦後日本映画については、川本三郎が「帰ってきた男たち——復員兵を描く映画」（『世界』五七〇、一九九二年七月）で詳しく紹介している。また、復員者を扱った文学作品も少なくない。大岡昇平「武蔵野夫人」（『群像』一九五〇年一〜九月）、野間宏「顔の中の赤い月」（『総合文化』一九四七年八月）など。
- (5) 「銃後も戦場であった（一）」（『井伏鱒二「講演と対談」』鳩の書房、一九七八年七月）
- (6) 「物語の氾濫」（『記号の雲…井伏鱒二から小沼丹まで』太田出版社、二〇〇八年五月）
- (7) 「原点にて——別れと見送り——日中全面戦争」（『国防婦人会』岩波書店、一九八五年四月）
- (8) 「昭和期の徴兵・兵事史資料から見た兵士の見送りと帰還」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇一、二〇〇三年三月）
- (9) 関特演について、芳田研一は「関特演の実像」（『環東アジア研究センター年報』六、二〇一一年三月）で、「一九四一年七月七日から実施された日本陸軍による対ソ開戦を見込んだ戦争準備のことである。従来実施されていた関東軍特種演習とは異なるので、はっきり区別するために関特演と呼称された」と記す。
- (10) 東郷克美「戦後の変貌——太宰の死まで」（『井伏という姿勢』ゆまに書房、二〇一二年一月）
- (11) 「疎開日記」（『FEMINA』一九四八年三月）
- (12) 「（銃後）の組織化——国防婦人会を中心に（銃後の女）への総動員」（『私たちの（銃後）』筑摩書房、一九八七年一月）
- (13) 「強兵育む日本の母——婦人総蹶起へ東条英機さん呼び掛け」（『東京朝日新聞』一九四三年一月二二日付朝刊）では、東条英機は「先ず第一に、私は皆様方日本婦人は、家庭を通じて国家に奉仕して戴きたい、別の言葉で申しますならば、日本の家族制度の美風を愈々昂揚して戦争完遂に貢献して戴きたいと思うのである」。日本の家族制度の美風とは、「常に家庭に止まり、妻として内助の功を積み、母として一切を我が子の養育に捧ぐる淑やかにして而も忍耐強き」女たちによって支えられるものである。さらに、女子の勤労について、「日本の女子動員は、米英流の女子動員とその本質に於いて全く異なつて居る点である。我国に於いては、我が国伝統の家族制度の美風益々昂揚しつつ、而も、女子動員の要求を充足せんとして居るのである」と説く。
- (14) 「総力戦体制と日常生活」（『軍国の女たち』吉川弘文館、二〇〇五年）

一月)

(15) 「戦争支援と徴兵逃れ祈願」『徴兵・戦争と民衆』（吉川弘文館、一九九九年六月）

(16) 「ただ、ひたすらに生きる……——復員・ヤミ市・パンパン」（『朝日ジャーナル』朝日新聞社、一九六六年二月二三日）

(17) 「遺族運動と戦争未亡人」（『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、二〇〇〇年十一月）

(18) 相原和邦「『遙拝隊長』の構造と位置」（『近代文学試論』一九七二年九月）

(19) R. L. ロスノウ・G. A. ファイン、南博訳『うわさの心理学——流言からゴシップまで』（岩波書店、一九八二年十一月）

(20) 堀亨『迷信・デマ・噂の心理学』（批評社、一九八四年）

(21) 「覚え書」（『井伏鱒二百選全集 第三卷』新潮社、一九八五年二月）

(22) 「聞書きという姿勢——『山峡風物誌』を読む」（『井伏という姿勢』ゆまに書房、二〇一二年一月）

(23) 「覚え書」（『井伏鱒二百選全集 第六卷』新潮社、一九八五年二月）

(24) 湧田佑『私注・井伏鱒二』（明治書院、一九八一年一月）

付記 テキストは『井伏鱒二全集 第十一卷』（筑摩書房、一九九八年）を使用した。

（り）とうよう、北京市月壇中学校